

Title	Influence of Estrogen on Fat Metabolism in Totally Depancreatized Dogs(Abstract_要旨)
Author(s)	Taniguchi, Tetsuo
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	1966-06-21
URL	http://hdl.handle.net/2433/211893
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

氏 名	谷 口 哲 大 たに ぐち てつ お
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 289 号
学位授与の日付	昭 和 41 年 6 月 21 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	Influence of Estrogen on Fat Metabolism in Totally Depancreatized Dogs (腓全剔犬における脂質代謝に及ぼすエストロゲンの影響に就いて)
論文調査委員	(主 査) 教 授 本 庄 一 夫 教 授 木 村 忠 司 教 授 伊 藤 鉄 夫

論 文 内 容 の 要 旨

腓全剔後の病態生理については多くの研究者により種々追求されて来ている。著者は腓全剔後、エストロゲン投与が生体に及ぼす影響を、特に脂質代謝の面より種々検討を加えた。

腓全剔を行った実験犬を、薬剤無投与群、インシュリン単独投与群、エストロゲン単独投与群、及びインシュリンとエストロゲンの併用群の4群を作成し、各々の群について種々検討した結果

(1) 腓全剔後の体重の減少は無投与群に比し、エストロゲン単独投与群では程度が軽く、インシュリンとの併用は更に良好な成績を示した。

(2) 腓全剔後の早朝空腹時血糖値にはエストロゲン投与による特別な影響は認められなかった。

(3) 腓全剔後の血清脂質の各分画は、エストロゲン単独投与群、インシュリン単独投与群、インシュリン、エストロゲン併用投与群のいずれも中等度の上昇を示すが、三者には有意の差は認められず無投与群では著明な高脂血症を示した。

(4) 腓全剔後、無投与群では殆んどすべての犬が脂肪肝を呈するが、エストロゲン単独投与群では17頭中僅か3頭に認められ、無投与群は2週以内に死亡するに比し、エストロゲンの投与は生存日数を4週以上に延長せしめた。インシュリンとの併用は更に長期生存せしめ得た。

(5) 腓全剔犬の血中 lipoprotein lipase 活性はエストロゲン単独投与により可成り良く維持され、インシュリンとの併用は更に正常に近い値を示した。

(6) 経静脈的に脂肪を点滴注入しても、無投与群以外の3群では注入後20時間には血中脂肪量は注入前の値に復した。無投与群では注入後20時間に於いても尚高値を示した。

以上の結果より腓全剔後エストロゲンの投与は全身状態を改善せしめ得るもので、このエストロゲンの作用は術後の脂質代謝に好影響をもたらすことによるものであり、糖質代謝を正常化せしめるインシュリンとの併用により更に良好な結果が得られた。

論文審査の結果の要旨

脾全剔後に投与されたエストロゲンの生体におよぼす影響を特に脂質代謝の面より検討を加えた。

脾全剔犬を薬剤無投与群、インシュリン単独投与群、エストロゲン単独投与群およびこれら併用群に分類し検索した結果、1) 脾全剔後の体重減少はエストロゲン投与により軽度となり、インシュリン併用によりさらに軽く、2) 早朝空腹時血糖値はエストロゲン投与により影響は認められず、3) 血清脂質分画は無投与群では著明な高脂血症を呈するが、他の3群では中等度であり、4) 無投与群では全実験犬が脂肪肝をきたすが、エストロゲン投与群では17頭中3頭に認められるのみとなり、生存日数も著明に延長され、インシュリン併用ではさらに良果が得られ、5) 血中 Lipoprotein Lipase 活性もエストロゲン投与によりかなりよく維持され、6) 脂肪点滴静注による高脂血も、無投与群では長時間高値を示すが、他の3群では正常に近い推移を示した。

以上、エストロゲンは脾全剔後の脂質代謝を改善し、もって全身状態に好影響をもたらすものであり、糖質代謝を正常化するインシュリンとの併用によりさらに良好な結果が得られた。

本論文は学術上有益にして医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。